

身の上を語る異類

——黄表紙と合巻における擬人化についての考察——

佐藤 至子

はじめに

人間でないものを人間になぞらえること、すなわち異類の擬人化は、現代では児童絵本、マンガ、ゲーム、商業広告など、さまざまな媒体に見うけられる。周知のとおり擬人化表現の歴史は古く、平安時代の絵巻『鳥獣人物戯画絵巻』には動物たちが人間のようにふるまう様子が描かれ、中世の仏教説話集『沙石集』には虫が問答する話などがある。中世の御伽草子や近世の草双紙にも異類が人間のようにふるまう物語が多く存在する。

人間の物語として表しうることがらを異類の物語として表すことには、どのような意義があるのだろうか。近世の草双紙に即して考えてみたい。例えば黄表紙『化物大江ばけものおおえ

山』(安永五年刊、恋川春町作)⁽¹⁾は酒吞童子説話のパロディであり、源頼光と四天王(碓井貞光・卜部季武・渡辺綱・坂田公時)による酒吞童子退治の物語が、そば(源のそば粉)と薬味類(碓井の大根・卜部の鰯節・渡辺の陳皮・坂田の唐辛子)によるうどん(うどん童子)退治の物語に書き換えられている。パロディの醍醐味が原作の踏襲と原作からの逸脱とのバランスにあるとすれば、『化物大江山』は酒吞童子説話の筋立てをふまえながら登場人物を日常的な食べ物に転換したところにおもしろさがある。異類の擬人化は、ここではパロディを生む手段になっている。

人間の物語のパロディとして異類の物語をつくるということは、異類が人間と同様の行動をとること自体におもしろさを見るところだが、こうした感性は、例えば軍記

物語のパロディとして読める異類合戦物（御伽草子や草双紙に多数の例がある）にも共有されていると言えよう。また、初期草双紙の『鼠のよめ入』や『鶴の嫁入』のような異類の嫁入り物も、人間の婚礼にまつわる習俗を異類の行為として描くという、枠組みの踏襲とそこからの逸脱が見どころのひとつになっている。異類合戦物が生まれた背景には軍記物語の流布と浸透があり、異類の嫁入り物が生まれた背景には婚礼に関する儀礼を記した『嫁娶重宝記』（元禄十年刊）等の実用書の流布があったと考えれば、擬人化された異類の物語の基盤には人間の物語についての類型的な把握があると言つてよいだろう。

しかし異類の擬人化は、パロディの案出にのみ帰着するものではない。本稿では、紙屑や古道具といったモノが身の上話をする形式の黄表紙『紙屑身上断』（ふるくずのうへはなし）『古道具掃除』を取り上げ、この二作の主眼が人間の生活や行状をうがつところにあり、擬人化はその視点を支えるものとなっていることを指摘する。また、類似の発想が見られる談義本『当世穴さがし』との比較を通じて、この二作を『莊子』に由来する寓言の系譜上に位置づけたい。さらに、同じくモノの身の上話という形式をもつ合巻『塵塚物語』に目を向け、この合巻では人間の生活や行状をうがつ視点は見

られず、モノの擬人化には別の意義が見いだせることを指摘したい。

『紙屑身上断』

黄表紙『紙屑身上断』（伊庭可笑作、天明元年刊）は、紙屑買い（使用済みの紙を買い集める業者）の籠から生紙（糊を加えずに漉き、加工をしない紙）の塵紙が現われ、同じ籠の中にいる紙屑たちに「おの／＼も、もはや明日は紙漉きの手へ渡る身の上、てんぐに身の上の懺悔話をなされぬか」と促すところから始まる（原文引用に際しては仮名を適宜漢字に置き換え、もとの仮名を振り仮名とし、清濁を整え、句読点を付す。以下同じ）。紙屑買いの男が耳を澄ませる傍らで紙屑たちが身の上話をし、最後は紙屑たちが玩具のみみずくの材料になり、荒神棚に上げられて大事にされたと結ぶ。作中に登場する紙屑、すなわち使用済みの紙および紙製品は十七種に及ぶ。身の上話をするのは生紙の塵紙を除く十六種で、それらを使った人間（身の上話の中に登場する）の階層もさまざまである。以下に、十六種の紙屑とそれを使った人間とを…で結んで示す。（）内は筆者による補記である。

唐紙の反古（「唐紙」は中国製の紙）…書家気取りの男

奉書ほうしよの菓子袋「奉書」は奉書紙……菓子屋・客・さい

づち頭の人

浅草あさくさの漉すき返し、「浅草」は浅草紙、粗悪な再生紙……御殿に使える下女

小菊の鼻紙……遊客・妓楼の若い者

程村古手形「程村」は程村紙、厚手の紙……金貸し

糊入り絵半切「糊入り」は米糊を加えて漉いた紙「絵半切」

は絵や模様を色摺りにした書簡用紙……遊女

半紙の一文風……子供

みす紙の使い残り「みす紙」は薄い鼻紙……煙草屋・

遊女

糊入り半切の手紙……医者

端切らずの袋……勧進坊主

美濃紙の裁ち外れ「裁ち外れ」は裁ち屑……侍

吉野紙の切り屑……納所坊主

日向半切の反古ほうこ「日向」は日向産の紙……呉服店の人々

漉き返しの半切……質店の人々

丈長の元結たけなが（丈長奉書で作った平元結）……下女

上田の鼻紙「上田」は上田紙、安価で鼻紙に使われる

……宿下しゆくかがりの下女

個々の身の上話は見開き二丁または半丁分の紙面で完結

し、相互の関連はない。つまり断片的な物語の集積として一作が構成されているのだが、むしろその点におもしろさがある。なぜなら、これらの話は総体として、当世を生きるさまざまな人間の内実を描き出すものになっているからである。

いくつか具体例を挙げよう。次に引用するのは「小菊の鼻紙」が語る話である。

なにか存ぞんじませぬが、私は馬道うまみちで四つ手駕籠かこの中へ買かわれましたが、どんぶりとやらの間あいだへ押し込み、駕籠かこの中から「早くやれ」と言いふと、ひと飛びに参まゐりましたが、大門かど口で下りて仲の町なかつへ上がり、酒など飲のむと、丁子屋やといふ暖簾のうれんのか、つた家の二階うちのかいへ上がり、女郎やうらが出ると遣手やりてや若い者が座敷へ来て、むしろやうにおだてかけられ、そこで私を三三枚出して、「肴さかなをしやう」と一枚づつやりましたが、よく考へますれば金の代わりそうにござる。やる金もないくらいなら遊びにゆかぬがようござる。茶屋ちやの損そんになりませう。そして若い者わかいものめが、もらつた所が金と引き換へにでもするかと存ぞんじましたれば、廊下へ出ると、ちんくとはなをかんて捨てられました。

小菊は遊里で紙花（祝儀の代用）として用いられた紙で、

一枚を二分として現金と引き換えたとされる。しかしこの話では、若い者は客からもらった小菊を鼻紙として使い、惜しげもなく捨てている。天明元年当時の吉原に実在した妓楼である丁子屋の名を出していることも興味深い。ここから推察されるのは、当時の吉原では小菊を紙花として出しながら後で相応の金額を支払わない客がいたということであり、この話はそうした現実をうがっているのではないかということである。「やる金もないくらいなら遊びにゆかぬがようござる。茶屋の損になりませう」との言は、そのような客への揶揄として解せるのではなからうか。

次に「端切らずの袋」の話を引用する。

わしはあんまりゑ、事には何でも使はれませぬが、中にも道心者の青坊主の手に渡り、仏餉袋にされましが、昔は仏餉袋へは二合か三合つ、米が入りましたに、今は五合の上ツ、入ります。此中もその坊主めが五文か八文で薩摩芋を二ツ三ツ買つて、長屋の婆様をあやなし、孫の所へ土産にやると、婆様もかみ様もかわい、子や孫にやさしくされて嬉しがり、あの西念様は子煩悩さと嬉しがる所へつけこみ、今度地藏様を建立しますから、お前方もどふぞ言ひ合わせ出て下されと頼み、さあそれから腹一杯取り込み、

しやうことなしに安い仏をこしらへ、又お暇乞いとやらかして、私が口を開けて真つ黒な米を詰め、釣台へ乗せ、ほかから寄つたよふに見せかけ、おのれは幟を持つて近所のかみ様婆様を騙して、江戸中引きづり廻し、しまひには仏様はどこへござつたやう行き方も知れず、集めた米を売り払い、坊主もどこへうせたやら、そのあとの空き店に私は残つておりました。

仏餉袋（仏に供えるための米を入れる袋）として使われた袋は、勸進坊主の魂胆と行状をあからさまに語り、詐欺同然の口を暴露している。これは当時の勸進をめぐる現実の一端をうがったものと推察される。

このように外からは見えにくい人間の行状や生活を赤裸々に語つてゆく姿勢は、これら以外の紙屑の話にも見いだせる。例えば「浅草の漉き返し」は、煙草の包み紙になり、おはした（御殿に仕える下女）に買われて女たちの部屋に入り、お歯黒をつける時に口を拭く紙として使われたと語る。また、「上田の鼻紙」は、宿下がりの下女に買われて芝居見物に連れてゆかれ、弁当の煮しめなどをのせられ、手拭きや鼻紙に使われ、最後は足のかかたとに挿まれた、と語る。

紙屑たちの身の上話は自らがどのように使われてきたかを回想するものである。注目すべきは、回想された情景において、(捨てられる前の)紙や紙製品は人間に一方的に使われる存在にすぎないことである。身の上話の中に能動的な主体として登場するのは紙や紙製品を使った人間のほうである。つまり『紙屑身上断』における紙屑の擬人化は、人間について物語る人間ではない、語り手の創出を目的としている。紙や紙製品といった人間の手元で使われるモノが語り手となるからこそ、人間の隠れた行状や生活をあからさまに描くことが可能になる。モノの擬人化は、人間の内実をうがつ視点を支えていると言えるよう。

『古道具穴掃除』

『紙屑身上断』と同様の発想は『古道具穴掃除』(虚空山人作、天明七年刊⁽⁶⁾)にも見られる。この黄表紙では、道具屋の男が耳を澄ませる傍らで種々の古道具が身の上を語る。冒頭に「世帯道具の座頭」と称する火内箱と薬鍋が登場し、他の古道具たちに「おのく明日はどのよふな所へゆこうも知れず。かく落ち合ふも他生の縁、身の上の懺悔話をなされぬか」と促し、古道具たちの身の上話が始まる。最後はすべての古道具が一人の人間に買われ、大事に手入

れされることとなったと結ぶ。

身の上話をする古道具は十六種、すなわち「唐机」⁽⁷⁾「通人の持ちしどんぶり」⁽⁸⁾「櫛箱」⁽⁹⁾「女郎の古簞笥」⁽¹⁰⁾「金貸の財布」⁽¹¹⁾「芸者の三味線」⁽¹²⁾「神道者の鈴」⁽¹³⁾「水茶屋の茶簞笥」⁽¹⁴⁾「葉箱」⁽¹⁵⁾「御寺のりん」⁽¹⁶⁾「辻独楽道具」⁽¹⁷⁾「占者の道具」⁽¹⁸⁾「呉服屋の算盤」⁽¹⁹⁾「御蔵宿の硯箱」⁽²⁰⁾「料理茶屋の銚子」⁽²¹⁾「針箱」である。身の上話はいずれも自らが誰にどのように使われてきたかを語るものであり、話と話は相互に関連せず、一話は見開き一丁ないし半丁分の紙面で完結する。このように本作には『紙屑身上断』と共通する点が多い。

人間の隠れた内実を揶揄をこめてうがつ話もいくつか見うけられる。例えば「唐机」の話は次のようなものである。

私が話をお聞きなされませ。学者必ず学びはすなわちその違わざるに近しと申して、引つ掻きはいたさねど、何の役にも立たぬ事をちよべくさと苦勞にいたし、よふく今年、芹の食われぬ歳で、庵が最層で、類は友をもつて集むるとはよく言つたもの、同じよふにくすばつたなりをしたやつと話をいたすのを聞きますに、昔なぞはかよふなみだりなる事はなかりしにと通人の身持ちが鬱陶しく思われ、人がどうしても手前より目の下に見へる心持ち、修学の身でも迷いや

すきは色の道と手前勝手な了見を出し、山出しのおふくといふ下女を孕ませて大きにかすられ、それからやけになつて私まで売り払いました。

唐机は自らの持ち主であつた学者について、無益なことに頭を悩ませ、昔と今とを比べて他人を見下し、といつて自身が高潔というわけではなく下女を妊娠させ、金を取られ、自棄になつて自分（唐机）を売り飛ばしたと語る。学者らしく装っているが品格に欠ける人間の内実を皮肉をこめて述べたものと言えよう。

「薬箱」の話も、うわべは医者らしく見せているが実際はたいこ医者（幫間同然の医者）である人間の行状を暴露するものである。要約して示せば、薬箱の持ち主であつた医者は実際はろくに薬の名を知らず、漢籍の書物は見せびらかしに持っているだけであり、難しい病家へは行かず、軽症の患者を見舞い、長居して儲け話を聞き出そうとしていた。夜中に病家から使いが来れば居留守を使つた。結局は医者をやめて本物のたいこ持ち（幫間）になり、被布をこしらえるために薬箱を売つた。たいこ医者がたいこ持ちへ転業したという結末が笑いを誘うが、そこにはたいこ医者への揶揄がにじんでいる。

もう一例、「御寺のりん」の話も見ておこう。りん（読経

の時に鳴らす仏具）が置かれていた寺には美しい女性がいた。住僧はその女性を甲子様と呼んで寵愛し、蛸を天蓋、女郎買いを引導を渡すなどと言い換え、戒名は金次第でいい加減に付けていたが、とうとう金に困り、寺を追放されたという。りんは「今時分、俗になられましたらふ」（今頃は還俗されたでしょう）と語つて話を終えるが、主意は言うまでもなく、墮落僧の生活を赤裸々に述べるところにある。

これらはいずれも古道具が元の持ち主である人間の品行を暴露するものであり、話の主役は人間である。『紙屑身上嘸』と同様に、人間に使われていたモノを語り手に据えることで、外からは見えにくい人間の行状や生活をうがつ視点が確保されている。

『当世穴さがし』

モノが当世の人間について語る形式を先行の戯作に探せば、談義本『当世穴さがし』（頼斎主人著、明和六年刊^⑩）に行き当たる。

『当世穴さがし』は豆粒ほどの大きさの男（豆男）が諸国をめぐり、出会つたモノたち（占いの道具類・楽器類・仏像・いけばなの材料となる生花類・楊弓・天神像・帯などの衣類・

伊勢神宮のお札など」と対話するという内容で、モノたちの饒舌な語りが見どころである。しかし、『紙屑身上斬』『古道具穴掃除』とは異なり、その話は身の上話にとどまらない。過去の回想がまったくないわけではないが、モノたちが多くのことを費やすのは当世の風潮に対する意見や批判である。

例えば巻一「三弦の流行」では、豆男が道具屋に入り込み、三味線と対話する。その三味線は豆男がかつて関係を持った後家の持ち物であった。三味線は豆男に一別以来の身の上をかいつまんで語った後、「扱お前方のお若い時とちがふて、今はうたがきつい時行、私が生れた時分は、河東（かとう）の世の中で、私などは河東で名を上た物だが、其比（げい）の芸と今のげいとは、お月様とすつぽんじや」と、当世の音曲の芸を批判し始める。三味線は、当世の音曲好きの人間たちについて「ふうが悪くなつた」と嘆き、遊里で遊ぶには金の足りなくなった人々が音曲に打ち込むようになったため、自腹を切らずにすむように立ち回り、三味線を弾く者は未熟なくせに易しい曲はとばして比較的難度の高い曲に取り組もうとし、歌を歌う者は少し声が出て歌えるようになると名人の身振りや意気込みばかりを真似て、とらしい名を名乗り、もつともらしい顔つきをしている、と

苦々しげに語る。

このようにモノが自らの属する世界に関わる人間の行状を厳しく批判する構図は、巻三「いけばなの立ぎ、」や巻五「簡屋の夜話」などにも見られる。「いけばなの立ぎ、」では、いけばなの会が開かれている茶屋に豆男が入り、使われずにいた切り花の牡丹と対話する。牡丹は「今は目録じやの、めんきよじやのと、あられもない事を書ちらかして、わたくしどもをば、切こまざき物にして、しかも手まへの内に立て置て、はなのすへになる迄もたのしまるれば、本望なれど、此やうに茶屋会にして、半時かそこいらに、ぬいてすてられ、めいわく千万」などと語り、現在の活け花の会のあり方を批判する。「簡屋の夜話」では、黒縮緬の袖頭巾が当世の女性たちについて「私をば夏冬なしにかぶり、びくにとまざれぬ様に、二尺ほどなかうがいであつぱり、風に向て吹流しのまねをして楽まるゝ。又ある時は鬱（うつ）としくもあるか、ゑりに斗巻付であるくも、何の為といふ事をしらぬ」と述べる（文中の「私」は袖頭巾）。要するに女性たちの袖頭巾の使い方がおかしいと批判しているのである。

このように『当世穴さがし』では、種々のモノが当世の風潮に批判的な視線を向け、人間への苦言を述べる。顧み

れば『紙屑身上嘸』『古道具穴掃除』には人間への揶揄がにじむ話はあったが、こうした率直な当世批判は見られなかった。これらの黄表紙の主眼は人間の行状を気の利いた文と絵で活写することであり、そこではうがちは重視されても、過去と現在を引き比べての批判には必ずしも至っていない。これは談義本と黄表紙というジャンルの性格の相違を浮き彫りにするものと言えるのではなからうか。

ところで、『当世穴さがし』の主意は当世批判であり、その主意をモノに託して示す形式をとっているが、この形式は『莊子』に言う寓言の手法（他に仮託して自らが伝えたことを述べる）にならったものと考えられる。『莊子』には動物など人間でないものに託して主意を述べるくだりも多々ある。談義本における『莊子』の影響については夙に中野三敏氏『戯作研究』⁽²⁾に論じられる通りであり、例えば鳥や虫などの対話を通じて人間の心の持ち方についての論を示す『田舎莊子』（佚斎樗山著、享保十二年刊）などが、その典型例である。

なお、『莊子』の影響は黄表紙にも及んでおり、人間が夢の中で虫類と問答する『女莊子胡蝶夢魂』^(おんなそうじこちようのゆめ)（黒木作、寛政四年刊）のように、『莊子』の受容が明確に見て取れる作品もある。『紙屑身上嘸』『古道具穴掃除』も、モノに託して主

意を示す形式をとっており、『当世穴さがし』と同様に、発想の根本は『莊子』の寓言につながると考えてよいだろう。そう考えれば『古道具穴掃除』の「穴」は『当世穴さがし』の「穴」と同じく、外からは見えない内情を意味する「穴」であり、「掃除」は「莊子」をふまえた洒落と解釈できるのである。

『塵塚物語』

モノが身の上を語る形式は、その後、合巻『塵塚物語』（山東京山作、全三編、初編弘化四年刊、二編嘉永元年刊、三編嘉永三年刊）⁽³⁾でも採用されている。だが、この合巻はいくつかの点で『当世穴さがし』『紙屑身上嘸』『古道具穴掃除』と異なっている。

相違点の一つは作品の構造である。『塵塚物語』各編は、当世の町人の世界と、かれらの住居の傍らにある塵塚（掃き溜め）に捨てられている古道具の世界とが並列的に描写される構造を持つ。初編・二編は八月十五日（月見）の晩の出来事という設定で、人間は宴に興じ、古道具は身の上話に花を咲かせる。三編では人間の物語の間に古道具の身の上話が挿み込まれている。具体的に言えば、（医者）の風田家に下女おふさが雇われる―風田家に商家の息子徳兵衛が

居候する——おふさが銀の簪を盗んだと疑われて実家に帰されるが無実と知れて呼び戻される——徳兵衛とおふさが恋仲になり夫婦となる——という物語があり、おふさが実家に帰される場面の後に尿瓶と銀の簪の身の上話が挿み込まれている。人間の物語が中断されて古道具の話に移り、また人間の話に戻るわけだが、銀の簪の身の上話——風田家の娘お花と下女おさんの不注意によって銀の簪がホオズキの殻と一緒に捨てられたという話——は、下女おふさの嫌疑が事実無根であることを明かす内容であり、人間の物語のなかりゆきに読者の興味をつなぐ効果をもたらしている。

相違点のもう一つは古道具が語る身の上話の内容である。初編に登場する挿鉢すりばち（女性として擬人化されている）の語る話を見てみよう。以下にあらすじを掲げる。

備前国に生まれた挿鉢は東へ下り、ある台所に買われ、播粉木と夫婦になった。⁽¹⁾しかし挿鉢は同じ台所にいるせつかい（挿鉢の内側についたものをこそげ落とす道具）と恋仲になり、播粉木がそれを知って大騒ぎになった。挿鉢とせつかいは駆け落ちして井戸に身を投げたが、せつかいは沈まずに引き上げられた。挿鉢は沈んだ後に井戸替えで引き上げられたが、ひびが入ったために味噌をする役には立たなくなり、唐辛子の植木鉢や火鉢として使われた後、塵塚に

捨てられた。

この話には、挿鉢が人間にどう使われてきたかということに加えて、播粉木との結婚やせつかいと密通という人間に擬した話題が含まれている。『紙屑身上噺』『古道具穴掃除』では、紙屑や古道具が語る話の実質的な主役は人間であり、紙や道具はただ語り手としてのみ擬人化されている。だが『塵塚物語』では古道具の語る話の主役は古道具自身である。いわば古道具は人間の傍らにありながら自らも能動的に生きる主体として擬人化されている。

さらに言えば、その擬人化は単に古道具を人間になぞらえるだけのものではない。古道具の物語は人間の物語の滑稽な模倣として表されていく。例えば挿鉢とせつかいの駆け落ちの場面には「道行多情雪野白味噌」と題する七五調の文章が記され、挿絵には板張りの舞台上で役者のようにポーズを取る挿鉢とせつかいが描かれている（初編十八丁裏十九丁表Ⅱ図版参照）。これは駆け落ちの情景を歌舞伎の道行の場面になぞらえたものだが、あたかも古道具が役者の物真似をしているかのような滑稽味のある情景になっている。

また、人間の世界と古道具の世界を平行的に描く構造も、それぞれの世界で繰り広げられる物語を重ねて見せること

を可能にしている。銀の簪の身の上話を改めて見てみよう。銀の簪は人間の不注意から捨てられ、いったんは風田家の外に出されてしまうが、ごみさらいに発見されて再び風田家に戻る。この話は、下女おふさの身の成り行き、すなわち盗みの疑いをかけられていったんは風田家から出されるが、疑いが晴れて再び戻るといっような物語をなぞるものになっている。人間の流転と古道具の流転とが重なるところにおもしろさが生まれている。

このように『塵塚物語』における擬人化は、モノに託して人間をうがち、批判することとは異なる方向性を持っている。では、『塵塚物語』は擬人化表現の系譜においてどのように位置付けられるのだろうか。

ここで播鉢の話を取り返したい。津田真弓氏が指摘しているように、『塵塚物語』播鉢の話の典拠は横井也有の俳文『鶉衣』前編（天明七年刊）の「播鉢伝」である。¹⁵「播鉢伝」は備前生まれの播鉢を女性に擬して綴ったもので、播鉢が播粉木と夫婦になり、せっかいと密通し、棚から身を投げてひびが入り、火鉢や唐辛子の植木鉢になったあげく塵塚に捨てられるまでを描く。¹⁶この「播鉢伝」は黄表紙『備前^{すりはちだい}播鉢一代記』（曲亭馬琴作、寛政十二年刊）の典拠にもなっており、そのことも既に津田氏によって指摘されている。¹⁷し

かし『備前播鉢一代記』と『塵塚物語』が作品構造の面でも共通点をもつことは従来言及されていないようなので、以下、やや詳しく述べたい。

『備前播鉢一代記』¹⁸のあらすじは次のようなものである。備前の播鉢屋五郎衛門の妻は荒神様から播鉢を授かる夢を見て懷妊し、娘しらぢを生む。しらぢは十六歳になり、東に下って御殿奉公をするが、近習の連木之助と密通し、御殿を追い出される。しらぢと連木之助は長屋暮らしを始め、播鉢と播粉木を購入する。その播鉢はしらぢの親の店で長らく売れずにあつた品だった。播鉢は播粉木と深い仲になる。連木之助は生活苦からしらぢを抵当として味噌兵衛から金を借りる。味噌兵衛はしらぢに言い寄る。台所ではせっかいが播鉢に言い寄る。連木之助はしらぢの心を疑い、喧嘩になる。播粉木も播鉢の心を疑い、喧嘩になる。連木之助はしらぢを遊女奉公に出し、味噌兵衛に借金を返し、諸道具を道具屋に売る。播粉木と播鉢は道具屋に売られ、離別する。しらぢはあちこちに売られたあげく夜鷹となる。播鉢もさまざまな人の手に渡り、棚から身を投げてひびが入り、唐辛子の植木鉢となり、犬の枕となる。しらぢは古主への帰参がなつた連木之助と再会し、再び幸せな身の上となる。播粉木も連木之助の手に戻り、播鉢と再会し、

再び連木之助としらぢのもとで使われることになる。

このように『備前播盆一代記』では、しらぢ・連木之助の流転と播鉢・播粉木の流転とが重なり合うように書かれている（「しらぢ」の名が播鉢の別名であることから察せられるように、しらぢの流転と播鉢の流転はともに「播鉢伝」をふまえている。）ちなみに作者曲亭馬琴は、翌享和元年刊の黄表紙『曲亭一風京伝張』^①でも、遊女と客の流転と煙管（遊女の持ち物）と煙草入れ（客の持ち物）の流転とを重ね合わせている。本作は『備前播盆一代記』の焼き直し作と言われているが、人間の物語と道具の物語とを重ねるおもしろさが一定の評価を得ると思われたからこそ、同趣向の作品を続けて著したとも考えられるだろう。

ここから『塵塚物語』に目を転ずれば、人間の世界とモノの世界を並行して描き、人間とモノの物語を重ねて見せる点で、『塵塚物語』は『備前播盆一代記』『曲亭一風京伝張』の流れをくむ作品であると言える。では、こうした合巻がなぜ幕末に作られたのか。『塵塚物語』初編が弘化三年十月稿、同四年刊行であることに改めて目を向けたい。天保の改革下で実行された諸規制の一環として、天保十三年六月に合巻の表現規制が強化され、それまでの合巻にはよく見られた、歌舞伎役者の似顔絵や芝居の趣向などを作中に

取り入れることが禁じられた。改革の主導者である老中水野忠邦は天保十四年に失脚し、弘化三年は規制が緩みつつある時期と推察される。しかし旧に復することは慎重にしなければならぬという判断が版元や作者の側にはあつたのではない。擬人化された道具の身の上話という、いわばたわいのない内容は規制を意識して選択されたものであろう。作中の播鉢とせっかいによる歌舞伎めかした道行は、規制に抵触しない表現の限界を作者なりに探った結果として解釈できるだろう。

おわりに

本稿では黄表紙『紙屑身上噺』『古道具穴掃除』と合巻『塵塚物語』を主な対象として、それぞれにおける擬人化の意義について考察した。擬人化には寓言の手法に結びつくものと、人間のパロディとして異類を表現するものという、二つの方向性があることが見えてきた。

山東京山は『塵塚物語』より前に『人心掃箒莊子』^②（文化十三年刊）という黄表紙風の合巻も書いている。これは塵塚に捨てられた古道具がそれぞれの身の上を語り、作者がそれに耳を傾けるという内容で、身の上話の集積として一作が構成される点は『紙屑身上噺』『古道具穴掃除』に

通じる。書名にいう「莊子」は「掃除」の洒落であり、モノが語る形式に『莊子』の寓言が意識されていることが推察される。一方で身の上話の内容は人間の行状を古道具の視点からうがつものではなく、古道具自身がどのような人間の手を経てきたかを主に述べるもので、古道具が自らを主役とする話を語る点ではむしろ『塵塚物語』に通じるところがある。

従来、黄表紙における擬人化については挿絵における擬人化表現の形態的な分類や見立ての発想との関わりに着目した研究⁽²⁾がなされてきた。本稿では、それとはまた別の角度から黄表紙・合巻における擬人化のあり方を整理できたと考える。擬人化における寓言とパロディという二つの方向性がその後はどのような展開をみせるのか、近世後期から近代にかけての様相については、今後の研究課題としてのい。

【注】

- (1) 『江戸の戯作絵本(一)』(現代教養文庫) 社会思想社、一九八〇年。
- (2) 伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』三弥井書店、二〇一七年。伊藤慎吾「虫合戦物の展開」・畑有紀「江戸後期」酒

餅論』作品とその社会』『軍記と語り物』第五十三号、二〇一七年三月。

- (3) 叢の会『草双紙事典』東京堂出版、二〇〇六年、二三一頁。
- (4) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵加賀文庫本。
- (5) 『日本国語大辞典』第二版(小学館)「小菊」「紙花」の項による。
- (6) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵加賀文庫本。
- (7) 『紙屑身上斬』では唐紙、「古道具穴掃除」では唐机が身の上話の語り手として最初に登場する。当時、中国由来の紙や道具が珍重されていたことを反映したものと思われる。
- (8) 「どんぶり」は紙入れのこと。
- (9) 四十二歳。「俗に芹は四十二年目につくる物ゆゑに四十二年の厄年に芹をくはぬものなりといへり」(『俚言集覧』)。
- (10) 中野三敏校注『田舎莊子 当世下手談義 当世穴さがし』(新日本古典文学大系) 岩波書店、一九九〇年。
- (11) 江戸浄瑠璃の河東節。
- (12) 中野三敏『戯作研究』中央公論社、一九八一年。
- (13) 津田真弓校注解説『塵塚物語』太平書屋、二〇一五年。
- (14) 播鉢は女性器、播粉木は男性器の隠喩でもある。
- (15) 津田真弓校注解説『塵塚物語』(注13前掲書)、二一九頁。
- (16) 堀切実校注『鶉衣(上)』(岩波文庫) 二〇一一年、岩波書店。

(17) 注15に同じ。

(18) 林美一編輯・校訂『未刊江戸文学』第三冊復刻版、一九八一年十月。原版は一九五二年十月刊。

(19) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵加賀文庫本。

(20) 棚橋正博『黄表紙総覧』後編、青裳堂書店、一九八九年、十八頁。

(21) 津田真弓校注解説『塵塚物語』（注13前掲書）。

(22) 木戸聖子・広部俊也「黄表紙の擬人化技法と『見立て』」、『新
潟大学国語国文学会誌』第四十六号、二〇〇四年七月。



図版 『塵塚物語』初編十八丁裏十九丁表（国立国会図書館所蔵、請求番号207-1444）